

ルリカとカウ

鹿児島県立大島高等学校 一年 要 未来

ランガチ村には、とても大きなランガチ森がある。その森は、ハブが人間から守ってくれるので、人間が来ることはほとんどない。そのため、森に住む生き物たちはのびのびと自由気ままに過ごしていて、まさにランガチ森は、生き物たちにとって最高の楽園だ。

そんな中、森で大きなため息をついている鳥がいる。ルリカケスのルリカだ。ルリカは、ガジュマルの木にまつて、一人で悩んでいる。「なんで私は、こんなにきれいな瑠璃色の着物を着ているのに、どうして『ギャーギャー』っていう汚い声が出るのだろう。」しかも、ルリカをもっと追いつめるように、さつき、いつも意地悪をするカラスたちがルリカを馬鹿にしていた。

「おい、ルリカ。お前の声って、本当に汚いよな。」

「俺たちの『カーカー』っていう声の方がよっぽどきれいな声だぜ。」

ルリカはカラスたちに馬鹿にされて、涙が出そうだったのを、必死でこらえていた。

「なんでこんな声なんだろう。もう嫌だ……。」
とルリカはそう思い、もう何度目か分からないほどのた

め息をついた時、誰かが声をかけた。

「ねえ、大丈夫。」

ルリカに声をかけたのは、アカシヨウビンのカウだった。カウは、ランガチ森で一番きれいな声を持つとうわさされてるアカシヨウビンだ。

「あつ、大丈夫です。」

「ねえ、さつきすごく大きいため息を吐いてたけど、なんか悩み事があるの。もし、よかつたら相談にのるけど……。」

とルリカの隣にとまつて聞いた。

「あつ、えつと実は……私の声なんだけど、すごく汚い声なんだ。だから、それで悩んで……。」

「ふうん。」

カウは少し考えてから、ポントと手をたたいた。

「じゃあ、特訓しようよ。私が教えてあげる。」

「えっ、いいの。ありがとう。」

ルリカはすぐくうれしかった。なんてつたつて、あのカウが教えてくれるのだから。

「そういえば、あなたの名前は。」

「あつ、ルリカです。カウさんですよね。よろしくお願
いします。」

「ルリカね。うん、よろしく。敬語じゃなくていいよ。
あと、カウでいいよ。」

ルリカにとって、カウと話すことは、これまでにない
幸せだった。

「そういうえば、ルリカの声聞きたいんだけど、いいかな。」

「あつ、うん。」

ルリカは緊張しながら、深呼吸をして、

「ギヤー、ギヤー。」

と鳴いた。「やっぱりダメだ……。」とルリカが思っていると、カウは少し考えてから、

「おう、すごい。いいね。よし、じゃあ明日から特訓ね。」

「じゃあ、また明日。」

と言って、飛んでいってしまった。「あれ、汚いとか言われると思った。カウって優しいな。」ルリカはそう思い、カウの後ろ姿を見送っていた。

翌日、ルリカとカウは、ルリカの声をきれいにするための特訓をした。特訓は、カウが出した声をルリカが真似するという簡単なことだった。カウは深呼吸をし、声を出した。

「キュルルルルル。キュルルルルル。」

やはりランガチ森でうわきさされているのは確かなくらしい、きれいで、うつくしい声だった。ルリカはその声にいやされていた。

「ほら、ルリカ真似してみて。」

「う、うん。」

ルリカは深呼吸をして、

「ギヤーギヤー。ギヤーギヤー。」

と声を出した。やっぱり汚い声だった。何度もやってみるが、全然うまくいかなかった。ルリカはすぐ落ち込んだが、カウだけは違っていた。

特訓し始めて数日後の昼のこと。その日もルリカは頑張って声を出していたが、何も変わっていなかった。「ダメなのかな。」と思い、ため息をついた時、カウは言った。

「もうため息ばかりついちゃダメ。あのね、今から、私が前から思っていたことを言うね。いい。」

ルリカは、いきなり言われて驚き、そして、「何を言われるんだらう……。」とすごく怖くなっていった。でも、決意を固めてうなずいた。

「私、ルリカの声はとても魅力的だと思う。」

「えっ。」

ルリカは一瞬固まった。カウは気にしないで、話し続けた。

「この特訓はね、元々きれいな声を出すための特訓じゃないの。ルリカに、ルリカにしか出せないその声を大事にしてほしい。大好きになってほしい。そう思って、特訓してきたの。」

ルリカは何も言えずに口をポカンと開けていた。

「ルリカ。私はルリカの声が好き。自分の声も好き。だから、ルリカ。ルリカも、自分の声、好きになって。」

「えっ、私の声好きなの……。」

「うん、大好き。」

カウが言ったことを聞いた途端、ルリカの目からは涙がいっぱい溢れていた。

「……ありがとう。私も、カウの声、大好き。なんか今の聞いて自分の声、好きになった気がする。」

ルリカがそう言うと、カウと目が合い、同時に笑った。

二人が笑い終わった後、ルリカが、

「特訓、今日で終わりだよね。でも、またこれから友達として仲良くしてくれる。」

ルリカが照れながら言うと、カウは、

「いや、友達じゃない。もう、私たち親友でしょ。」

カウにそう言われて、ルリカはとてうれしくなり、涙が出てきた。でも、

「うん。」

と言って、涙を拭うと、カウにとびきりの笑顔を見せてから、抱きついた。

「ちよっと、暑い……。」

「離れないからね。私たち、親友でしょ。」

ルリカがそう言うと、また一緒に笑った。

ランガチ森の上にある雲一つない青空に、二羽の鳥がすうっと飛んでいて、二羽のとてもきれいな声が響き合っていた。